

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	徳島 祐彌
論文題目	アメリカにおける体育カリキュラム論に関する研究 —1960年代以降におけるカリキュラム・モデルの諸潮流の成立と展開—		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、1960年代以降のアメリカにおける体育 (physical education) カリキュラム論に関する研究である。1970年頃までのアメリカの体育において、依拠する教育的価値の異なる立場が大きく4つ示されてきた。それは、「身体の教育 (education of the physical)」、「身体を通じた教育 (education through the physical)」、「運動教育 (movement education)」、「遊びの教育 (play education)」である。これらの立場は、1960年代から1970年代を経て、1980年代以降の体育論にも直接的・間接的に影響を与え、それぞれの系譜を引き継ぐ新たな主張も展開された。他方、多様な教育的価値の見方を包括するような体育カリキュラムの枠組みを作る試みもなされていた。</p> <p>以上のようなアメリカでの展開に即して、本論文は、(1) 4つの立場に位置づく論者が、それぞれの教育的価値を実現するためにどのように体育カリキュラム論を展開してきたのか、(2) それぞれの立場の体育カリキュラム論の特質と課題は何か、(3) 包括的な体育カリキュラムの開発の試みはどのように展開してきたのかという問いを追究するものである。</p> <p>アメリカの体育カリキュラム論に関する先行研究では、本論文で検討対象としている個別の理論や系譜が検討されてはきたが、下記の三つの点に課題があった。第一に、1つの立場の体育カリキュラム論の成立・展開の過程に着目する傾向にあり、それぞれの立場の相対的な位置づけを描き出すという点では不十分である。第二に、体育カリキュラムの開発と設計をめぐる論点についての検討が十分になされていないことである。第三に、1つの立場の体育論の利点を主張する傾向があり、「複数モデルのカリキュラム」など、多様な教育的価値を包括するような体育カリキュラム設計論の位置づけが十分に明らかにされていない点である。</p> <p>そこで、本論文ではまず、依拠する教育的価値の異なる4つの立場に即して、それぞれの立場の代表的な論者・団体の所論を対象としながら、フィットネス教育 (第1章)、身体活動を通じた精神面での発達を重視する系譜 (第2章)、運動教育 (第3章)、スポーツ教育 (第4章) のカリキュラム論の成立・展開過程が検討された。その上で、体育を包括するカリキュラムの枠組みを構築する試みが検討された (第5章)。終章では、各章で明らかになった知見に総合的な考察が加えられ、下記のような、本論文の成果がまとめられている。</p> <p>本論文の成果としては、第一に、体育カリキュラム論のそれぞれの系譜の特質と課題を明らかにした点を挙げるができる。具体的には、コービン (Corbin, C. B.) らのフィットネス教育、ヘリソン (Hellison, D. R.) の責任指導論、冒険教育、グレアム (Graham, G.) らの運動教育、シーデントップ (Siedentop, D.) のスポーツ教育などについて、目的論と具体的な指導計画などが検討されている。</p> <p>それに止まらず、第二に、依拠する教育的価値の異なる立場の位置づけを明確化し、各系譜の関係を構造的に捉えるべく、2つの軸で構成される枠組みを提示した点を挙げるができる。1つ目の軸は、身体的・技術的価値を重視するか、情意的・人間関係的価値を重視するかという軸である。2つ目の軸は、手段的・外在的な価値を重視するか、目的的・内在的な価値を重視するかという軸である。この2つの軸に即して各論者の立場の位置づけを考えることで、諸系譜の間の関係が構造的に整理された。具体的には、フィットネス教育は身体的・技術的価値かつ手段的・外在的価値、責任</p>			

指導と冒険教育は情意的・人間関係的価値かつ手段的・外在的価値、運動教育は身体的・技術的価値かつ目的的・内在的価値、スポーツ教育は情意的・人間関係的価値かつ目的的・内在的価値に位置づくといわれる。

本論文の第三の成果は、特定の教育的価値に依拠した個別の体育カリキュラム論の展開と、包括的な体育カリキュラム論の構築の試みの流れを区別し、体育カリキュラム論の歴史的な展開過程の論理を明らかにしている点である。1960年代には、個別の体育カリキュラム論は形成段階にあった一方で、ブラウン（Brown, C.）らが包括的な枠組みを提示した。1970年代から1990年代には、個別の体育カリキュラム・モデルが洗練されており、ジュエット（Jewett, A. E.）らは「目的-プロセスによるカリキュラムの枠組み（Purpose Process Curriculum Framework : PPCF）」をそれらのモデルと並ぶ一つのモデルとして提示した。そして、2000年代以降に提唱されているルンド（Lund, J.）らの「スタンダードに基づく体育（standards-based physical education）」では、個別の体育カリキュラム・モデルを取り入れた設計が示されている。このように、個別の体育カリキュラムを構築する試みと、包括的な体育カリキュラムの枠組みを構築する試みは、互いに並列される関係から、両者を二層で捉え、そのギャップをどのように埋めるかという方向で模索されてきたものと整理することができる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、1960年代以降のアメリカにおける体育 (physical education) カリキュラム論について、歴史的な成立過程を遡り、また、検討対象となるそれぞれのカリキュラム論の思想的背景とカリキュラム設計の具体とを関連付けた検討を通じて、その全体的な理論的構図を明らかにした労作である。

1970年頃までのアメリカの体育カリキュラム論においては、依拠する教育的価値の異なる4つの立場が存在していた。「身体の教育 (education of the physical)」、「身体を通じた教育 (education through the physical)」、「運動教育 (movement education)」、「遊びの教育 (play education)」の4つである。これらの立場は、1960年代から1970年代を経て、1980年代以降の体育論にも直接的・間接的に影響を与え、それぞれの系譜を引き継ぐ新たな主張や取り組みも展開されてきた。他方、多様な教育的価値の見方を包括するような体育カリキュラムの枠組みを作る試みもなされてきた。本論文は、そうしたそれぞれの系譜や試みについて、理論と実践の成立・展開過程を丹念に検討し、それぞれの特質と課題を明らかにするのみならず、体育カリキュラム論の基本的な論点に即して、それぞれの系譜の相互関係を構造的に捉える枠組みも提起している。

本論文の成果としては、主として次の三点を挙げることができる。

第一に、体育カリキュラム論のそれぞれの系譜の特質と課題を明らかにした点である。それぞれの系譜の理論と実践については、主に体育論を専門とする論者による先行研究において、個別に検討がなされているものもある。これに対して、本研究は、体育カリキュラム論の他の系譜との関連において、また、体育に限定されないカリキュラム設計についての一般的知見との関連において検討することで、それぞれの系譜の特質と課題をより明確に描き出すものとなっている。

第二に、依拠する教育的価値の異なる立場の位置づけを明確化し、各系譜の関係を構造的に捉えるべく、2つの軸で構成される枠組みを提示した点である。身体的・技術的価値を重視するか、情意的・人間関係的価値を重視するかという軸と、手段的・外在的な価値を重視するか、目的的・内在的な価値を重視するかという2軸で、それぞれの系譜の相互関係を類型化することに止まらず、その軸は体育カリキュラム論の論点を構成する軸でもあり、4つの系譜の論争を含んだ歴史的な展開の論理を説明するものとなっている。また、その枠組みは、本論文の目的や事例の代表性の観点から、本論文の検討対象としなかった体育カリキュラム・モデルをも位置づける視野の広がりを持っている。

本論文の第三の成果は、特定の教育的価値に依拠した個別の体育カリキュラム論の展開と、包括的な体育カリキュラム論の構築の試みの流れを区別し、体育カリキュラム論の歴史的な展開過程をより立体的に明らかにしている点である。価値対立を含んだ多様な系譜がそれぞれに展開する状況においては、折に触れて、価値中立性や包括性を志向し、それらを統合しようとする試みが生まれる。各系譜の間の価値対立を含んだ論争的展開に加えて、それらを包括的に統合しようとする志向性も含めて整理することで、体育カリキュラム論の展開過程の論理を浮き彫りにするものとなっている。

試問においては、以下のような点が指摘された。4つの系譜をこのように整然と分類することができるのか。教育的価値の志向性としては4象限の枠組みで類型化できるかもしれないが、それぞれの系譜において、他の系譜とも重複する複数の目標が追求されているという関係性ではないか。それぞれの体育カリキュラム・モデルにおいて、対象とする発達段階の違いがあると思われるので、その点がより明確化される必要があるのではないか。スポーツ教育論における「真正性 (authenticity)」概念の

思想的背景や、体育カリキュラム論において参照される学問の中身についてより突っ込んだ検討があってもよかったのではないか。アメリカの60年代以降の体育カリキュラム論の展開に対象を限定しながら厳密に解明する一方で、日本の体育カリキュラム論の現状と課題、および、自身の問題意識や理論的展望を、序章や終章においてより明示的に展開してもよかったのではないか。

このように本論文には今後の課題も残されているものの、それらは本論文の学問的意義を損なうものではなく、試問においても適切な応答がなされた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年2月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、期間未定の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降